

謹言上

當國珠々郡三崎高勝寺々領、佛供燈明修造祭田、都合四拾六貫文、今度一圓御易之事。

抑々此珠々權現者、日本一芴四角一點之守護神、北之一方堅而魔王鬼神防、佛法王法之鎮守而國土安穩諸人快樂之誓願深重也。依之勅宣年中仁四季祭禮、七十五度之御神事、朝暮勤行、每日之法樂、從欽明天皇^(御號)宇^(御號)及二千余年、至于今無退轉。是則依^(論)輪言御教書并當國御屋形様之御判奉行之制札、爲御披見指上候。且爲佛法王法敬信、且爲國家万民撫育、如前々於寄附者、彌武運長久之基、可爲末代明鏡者也。仍訟狀如件。

天正五年十一月 日

高勝寺衆徒等

(この文書宛所を載せざるも、上杉謙信又はその配下部將に訴へたるものなるべし。)

十二月八日。本願寺坊官下間頼廉、堀五兵衛に、その江沼郡塩濱及び能美郡串村に於ける戦功を賞す。

【北徴遺文】

一六〇二

去比塩濱夜討之刻、首一被討捕之通逐披露候。御感之旨能々得其意可申下之由被仰出候。彌無退屈可被抽忠節事肝要候。謹言。

刑部卿法眼

天正五年九
十二月八日

頼 廉 在判

堀 五兵衛殿

【北徴遺文】

一六〇三

去比串村夜討之刻、首一被討捕之通令披露候。御感之旨能々得其意、可申下由被仰出候。彌無退屈可被抽忠節事肝要候。謹言。

刑部卿法眼

天正五年九
十二月八日

頼 廉 在判

堀 五兵衛殿

(この二通年次を明らかにせずといへども、九月廿五日附の感狀と共に天正五年に在るが如く、その戦

闘は八月より九月に至る間に行はれしなるべし。)

十二月十八日。上杉謙信、その臣北條高廣に、故畠山義隆の寡婦を高廣の子景廣の室たらしめんことを議す。

【歴代古案】

一六〇四

以別紙申候。如此之事迄、沙門之進退ニ而不似合候得共、丹後守三十ニ成迄足弱無之候。是者定謙信不合氣ニ者ニ好思慮故、于今縁邊無之与校慮申候間、様々雖躰娘候、結局愚氣遣など候得者、父子共ニ可爲迷惑候間、此度七尾納手裏候時、畠山義隆御臺・息一人有之候ツル。是者京之三條殿之息女ニ候間、年頃も可然候歟与思、息をバ身之養子ニ置、老母をバ丹後守ニ可爲申合、爰元々召連、則丹後守預置候。少茂不足之分ニ者無之候。以衣鉢可申候。僞ニ無之候條、彼息謙信養育申上者、身之かたへの好ニも成候事候間、其方異見、春中早々被迎取候様ニ頼入候。目出彌可申候。謹言。

天正五年
極月十八日

謙 信 在判

北條^(高廣)安藝守殿

(文中に老母といふ者は畠山義隆の後室を指す。)

天正六年

戊寅

皇紀二二三八

正月九日。岩代の蘆名盛氏、上杉謙信の臣新發田長致に、謙信の能登・加賀を平定して凱旋せるを祝す。

【濱崎文書】

一六〇五

態以使令啓之候。今度謙信、能州・賀州被入手裏御納馬之由、誠目出、當方満足不過之候。依之今般及御音信候取成任入候。然者此口弓箭之儀者、限守山^(岩代)悉入手裏候。石川之儀者在城一ヶ所迄候。其外無殘入手裏候。以前之自言箭、猶如存分屬本意候。定可爲大慶候。猶彼口上可有之候。恐々謹言。

追啓、盛隆鼓數奇と申候。此口鼓皮拂底候。可然皮一枚可給候。

天正六年
正月九日

蘆名盛氏
止々々齋